箱根駅伝

祝 総合優勝
特別ロングインタビュー

飯田 貴之

令和4年箱根駅伝を見事大会新記録で総合優勝した青山学院大学陸上競技部。主将としてチームをまとめた飯田貴之さんにお話をお伺いしました。

中学生の時によく走った景色の中で

悔しさから生まれた「迷ったら攻めろ」で走りぬいた箱根駅伝

――箱根駅伝総合優勝おめでとうございます。主将として過ごした1年間を振り返って、いかがですか。

ありがとうございます。

主将として、最高学年としての1年間は、1年生から3年生までとは全く違いました。実は、主将になった当初はそんなにプレッシャーを感じていなかったんです。実際それまで3回箱根駅伝を走りましたけど、緊張していなかったですし。青学という強いチームの主将になれるのは嬉しかったし、ワクワクしていました。

ただ、駅伝シーズンが始まって急に主将としてのプレッシャーが来ました。やけに緊張してしまって。出雲駅伝では試合前の自分のメンタル面に異変を感じましたし、全日本大学駅伝でもいろいろな事を考えてしまって、結局負けちゃって。競技人生というか、人生で一番悔しかったです。

全日本の帰りの電車では、本当に悔しくて立ち直れないくらい落ち込んでしまって。原晋監督が気を使って話かけてくれるほどでした。おなか減ってないのにカツサンド勧めてくれたり和ませてくれたり……。その時に監督から「俺の判断も悪かった。でも迷ったら攻めるしかないよな」って言葉を貰いました。

「迷ったら攻めろ」その日から、箱根駅伝は絶対に攻める、どんなレース展開でも守りに入らないって、そう思って練習をやってきました。監督から貰ったその言葉は大きいですね。座右の銘は全部「迷ったら攻めろ」と書いています。

最後（箱根駅伝）だけは、個人としても区間賞を取って、チームとしても総合優勝したいという気持ちが大きかったです。僕が大学に入ったタイミングから、他の大学も駅伝のレベルが上がってきていて、そんな中で今回優勝できたのは本当に嬉しいですね。

――主将として特に頑張ったことはありますか。

陸上に時間をすごく費やしました。主将になったからこそ、部員に見られているって意識もあり、「チーム内で自分が一番陸上に時間をかけたんだ」って言えるくらい取り組みました。

あと、信頼される主将になるために、良い意味でプライドは捨てていました。4年生として後輩に負けられないってプライドはありましたけど、普段生活している上での目線は

大学4年間で箱根路を堪能しました

後輩に合わせていました。練習時に4年生としての厳しさは出していても、普段は気軽に話せる環境を意識していました。

――箱根駅伝はさまざまな区間を走りましたね。

箱根駅伝は、4年間全部違う区間を走りました。往路復路でも被っていません。そんな人は、なかなかいないと思うので良い経験ですね。箱根路をおもいっきり堪能しました。

――監督について教えてください。

僕は監督とすごく話をするんですけど、めちゃくちゃいじってくるんですよ。監督にチャラいと思われていて、1年目から「チャラ君」「チャラ君」って呼ばれていて、全然そんなことないのに……本当にやめてほしいと思っていました（笑）

監督は、いろいろな分野が詳しい所がすごいですね。考えるスケールが大きくて、自分の部だけを強くするとかマネジメントするとかだけじゃなくて、どうやったら陸上競技界がもっと盛り上がるのか考えているんですよね。「競技者がちゃんと陸上競技を続けていって、プロになって、稼げる環境を作りたい」とよく言っています。

トレーニングのメソッドもかみ砕いて説明してくれます。メニューを渡されてただやるんじゃなくて、全部これは何のためにどういう部位を鍛えているかって、トレーナー含めて、理論的に教えてくれました。それが、強いチームの理由にもなっていると思います。

――試合前のルーティンはありますか。

特定の食べ物を食べるとかはないですね。髭を剃ったり、ヘアアイロンを使ったりして身だしなみを整えて気合を入れています。テレビの映りを気にしているわけじゃないですよ。気にしていたらあんなにきつそうな顔していないです（笑）。「せめてスタート前までは」って、楽しむ気持ちはいつもあります。

あとは、大会で遠征する時は、いつも寮を出る前に部屋はしっかりきれいにして出ています。

――来年の目標を教えてください。

来年は、ニューイヤー駅伝に出たいですね。強いチームに入るので、出場するのは難しいとは思いますが、環境が変わった瞬間はすごく頑張る性格なので、1年目は結構自信があります。

大学1年生の時の練習も、目標とする先輩にがむしゃらについていけば良いって思っていたので一番やりやすかったです。上級生になると後輩に見られるので、「ちゃんと走らないと」という気持ちがあり、やっぱり大変でしたね。社会人になったら、まずは強い先輩の背中を追いかけて頑張りたいと思います。

▲箱根駅伝第4区を首位で走る飯田さん（本人提供）

――東庄町について、エピソードなどあれば教えてください。

僕、マジで東庄町が大好きなんですよ。

大学に行ったら余計好きになって。東京に染まっても魂だけはこっちにあるって思っています。大学のある都内の人混みが嫌で、落ち着かなくて。東庄町みたいな田舎って良いなって改めて4年間で思いました。

特に、4年生になってからは、そう強く思いましたね。何回も家に帰りたいと思いました。1回、本当に帰ろうとしたことがあって。練習が1日休みの日に、朝東庄に帰って、ちょっと家でゆっくりして寮に戻ろうかなって思ったくらい。でも、1回帰っちゃうと、その後何回もやるなって思って……。そんなこと考え

▲東庄町のいちごをほおばる

マジで東庄町が大好きなんですよ

たのは、４年目になって初めてでした。

――町でよく走っていたルートを教えてください。

中学生の時は、笹川駅から中学校下の田んぼ（桁沼）、羽計、竜神台の下、役場の横を通って、家に帰っていました。８～９キロくらいのコースです。放課後、部活をした後に走っていました。

――両親への思いを教えてください。

普通の家庭よりはちょっと厳しかったと思います。父とは、小学校時代に硬式野球チームでコーチと選手の関係だったこともあり、競技に対しては特に厳しかったです。母は心配性でうるさくて（笑）。

高校時代、母は毎朝４時に起きて僕を送り出してくれたり、父は仕事帰りに東京の治療院まで迎えに来てくれたり、人一倍世話をかけました。大学の寮に入ってからは「今日は寒いから体に気をつけて」とか、ちょっとしたメールが届くとありがたいなって思います。

高校生の時、怪我が多く思うような成績を残せていなかった自分が当時箱根３連覇中の青山学院からスカウトされた際、父は「そんな強い大学に入っても埋もれるだけだ」と言ってなかなかＯＫしてくれませんでした。当時の僕には迷いがなかったので、説得を続け、最後は父との約束事を交わした「家族の誓い」を書いて青学への進学を認めてくれました。後で知りましたが、父は青学を反対した訳ではなく、僕を埋もれさせないように覚悟を持たせるためにしたことでした。

結果的に箱根を４回走り、大学三大駅伝全てに出走して、父との約束を果たすことができました。今は青山学院への入学を許して支えてくれた両親に心から感謝しています。

――町民へのメッセージをお願いします。

家族やＳＮＳを通して、たくさんの人が、日ごろから応援してくれていて、本当にありがたいです。東庄中学校の生徒からＳＮＳにメッセージで「応援しています」と来た時は、嬉しかったですね。

僕が中学生の時は、スポーツといえば、野球やサッカー、バスケだったし、今ももちろんかっこいいスポーツだと思います。でも、陸上競技をやってきた身としては、陸上競技や駅伝を見てくれたり、興味を持ってくれたりする人が、この町で増えてくれるとすごく嬉しいです。

――子どもたちへのメッセージもお願いします。

そんなに偉そうなことは言えないですけど、僕は「夢（目標）は叶う」と思っています。現在、将来の夢がない子は「理想の自分を思い描く」「将来何をしていたいか」などで、まずは夢を持つことが大事ですね。そういう気持ちは絶対に自分を動かす力になると思います。

夢を持って、それに向かって努力すれば絶対に叶う。もしその夢が実現することが難しくても、別の形で目指してきてやってきたことが活きると思うので、信じてやってほしいです。

飯田　貴之

◎平成11年（1999年）６月生まれ。東庄中学校、八千代松陰高校を経て、青山学院大学へ進学。箱根駅伝は１年生で８区、２年生で５区、３年生で９区、今年は部の主将として４区を走り、総合優勝を果たす。４月からは富士通に就職が決まっている。